

泣き虫ポチ 上
～ゲーム世界を歩む～

六つ花えいこ Eiko Mutsuhana



アルファボリス文庫

熊將軍

ゲーム職業：聖騎士
丸太のような腕で
皆を守る強面紳士。

お猫様

ゲーム職業：狩人
思春期真っ最中の
ツンデレ少年。

お兄さんB

ゲーム職業：暗殺者
無愛想ながらも
面倒見がいい青年。

ポチ

愛歩の操作する
ゲームキャラクター。

お姉さん

ゲーム職業：魔術師
お色気たっぷりの
グラマラスな美女。

お兄さんA

ゲーム職業：聖者
爽やか青年。一度
笑い出すと止まらない。

いのうえ あゆみ

井上愛歩

振られたばかりのOL。
気晴らしにはじめた
ネットゲームの世界に
トリップしてしまい――？

登場人物
紹介

プロローグ はじまりの一步

「ずっと貴方あなたが好きでした。付き合ってください」
「無理」

彼への一年間の想いは、本人に放った瞬間、たったの二文字で終わりを迎えた。



鮮やかな色合いに街を染めはじめた木々が、秋の訪れを伝える。そろそろ、もう一枚羽織はおりが必要だなあと身を震わせた。

他の街路樹より一足早く色づいた銀杏いちょうの葉が、ヒラヒラ舞いながら足元に落ちてきた。普段なら、その可愛らしい姿を見て笑みを浮かべただろう。しかし今日ばかりは、秋らしい素敵な光景に、心を弾ませることができない。しくしくと痛む心が、自分でもどうしようもないほど深い場所に沈みこんでしまっていたからだ。

カサカサ音の鳴る落ち葉を、おろしたてのブーティーの踵でヤケツソのように踏みしめてやった。履き口のまわりについているビーズが可愛くて衝動買いした、お気に入り靴だ。

俯いた拍子に顔にかかった髪をかきあげた時、手がバレッタに触れた。これも、秋らしくて一目惚れしたもの。

靴と髪飾りだけじゃない。スカートにジャケット、トップス、バッグ、アクセサリ、タイツ、ネイルのストーンまで——全部全部、お気に入りのものでばりだ。

どんなファッションが似合うかは、自分が一番わかっている。たくさんのアイテムから色を選び、素材を合わせ、とっておきの自分を演出して挑んだ勝負だった。

なのに、私に向けられた評価は、たったの二文字。

『無理』

びやあああ、と溜息とも悲鳴ともつかない声を吐き出した。勢いのままバレッタを外せば、気合いを入れて巻いた髪が風になびく。そのまま前へ進もうとして、私は土偶みたいに固まった。次への一步がどうしても踏み出せず、立ち止まってしまふ。

夕闇迫る歩道には、家路を急ぐ人たち。彼らに逆らうようにポツンと立ち尽くし、俯いているのは——低身長・低収入・低学歴の、3Kならぬ3Tの井上愛歩、二十四歳である。そんな私は今朝、通勤時に通る駅のホームで告白劇を繰り広げてきた。

毎朝、電車で見かける名前も知らない男性。彼に恋をしたのはちょうど一年ほど前になる。今日みたいに、世界が赤や黄色に輝きはじめた秋の日だった。

当時、私はかわりばえのしない毎日に辟易していた。就職したのと同時に憧れの一人暮らしをはじめてみたものの、会社と家を往復する日々。なんとも色のない世界に来てしまったものと、与えられる日々を黙々とただ消費するだけだった。憧れとは真逆の、ふわふわ漂うだけの生活にさっさと見切りをつけて、実家に逃げ帰ってもいいかな、なんて思いはじめていた頃に……

「彼」を見つけた。

車窓に映る、ただ赤と黄色を散らしたただだった街並み。それが彼の背景になっただけで世界一綺麗な景色になった。そしてそれ以上に美しい彼に、吸い寄せられるようにコトンと心が落ちたのは、とても自然なことだと思えた。

彼は、潤いのない私の日常に現れた救世主だったのだ。

彼に会うために毎日会社へ通った。

彼を見かけると元気が出た。彼を思い出せば笑顔で人に接することができた。

彼がいるだけで無色だった私の世界は輝きはじめた。彼を好きでだけで、いくらでも

名前すら知らない男性なのに。

歩道で立ち止まっていた私は、ぐすんぐすと鼻をすすり、重い足をなんとか前へ踏み出した。

まわりの人たちは、人目も憚らずに泣いている私と一定の距離を取って歩く。私だつて、街中で号泣しながら歩いている人物を見たら、同じようにするだろう。下手に声をかけて、面倒事に巻きこまれては大変だ。

ささくれた私の心にとどめを刺すように、冷たい秋風が吹いた。

私は鼻をすすって、歩き続ける。こんなに涙が溢れてくるのは、恋に破れただけでなく、友情にも失望したからだ。

一年分の彼への恋情を、誰より深く知っていたはずの親友。

私は週に一度、彼がどれほど格好いいか、どれほど美しいか、どれほど色気があるか、どれほど彼に触れてほしいか、千文字以上のメールで伝えていた。

それに対し、彼女はいつも思いやりのある返事をくれた。そりゃ、単語が二つぐらいの、十文字にも満たないメールばかりだったけど。それでも、私は嬉しかったのだ。

憧れの彼に振られてしまった私は、昼休み、会社のトイレで彼女にメールを送った。

部署に戻る時には、平静じゃないといけない。だから、号泣したいのを我慢して我慢して……だけど、こぼれてしまった涙で視界がにじむ中、震える指でメールの送信ボタンを押したのだ。

彼女はきつと私の気持ちを理解してくれて、一緒に涙してくれるだろう。『辛かったね、今日飲みに行く？ 話でも聞こうか？』なんて十文字以上の返事をくれると信じていた。

なのに！

彼女から返ってきたのは、『南無』の二文字。

南無って何？ 南無妙法蓮華経？ なんていきなりお経なの？ 私、振られたからってお寺に駆けこもうなんて思っていないよ？ それとも、もうこれが最後の恋だろうから潔く剃髪して出家しろってこと？

意味のわからない二文字の言葉に、私はずたずたに打ちのめされた。

告白の返事が二文字なら、慰めの言葉も二文字。私には、きつと二文字分ぐらいしか価値がないんだ。思い出すだけで、ぼろぼろと涙が溢れてきた。

——見めているだけで充分だった。同じ電車に乗っているだけで幸せだった。

だけど、ついそれ以上を望んでしまった。見つめてほしい、名前を呼んでほしい、手を引いてほしい、頭を撫でてほしいと。

そうだ、なら告白しよう！ なんて思い立ったのは昨夜のこと。そして決行したのは、今朝。

誰がどう見ても、思いつきの行動である。もちろんながら結果は散々で、あっぱれ見事に木っ端微塵のこーなこな。

よくよく考えれば、結果なんてわかりきっていたのに。いや、よくよく考えなくても、わかりきっていたのに。想いを伝えたい、伝えたらきつと……恋する乙女真つ最中だった私は、そんな妄想ばかりしていた。

……私のこの甘ったれた恋には、やっぱり二文字で充分なのかもしれない。涙と一緒に「はあ」と溜息（ためいき）を一つこぼし、私はゆっくりと家路をたどった。

一人暮らしをしているマンシヨンの部屋に帰りつくと、ドアノブにレジ袋が引っかけられていた。オートロック式のエントランスを開けられる人間は、限られている。件の親友にも解除番号を伝えていたことに思い当たり、私のテンシヨンは急速に跳ね上がった。彼女は、鉛（あめ）と鞭（むち）の使い分けが上手なのだ。先ほどは厳しいメールが送られてきたものの、レジ袋には私を励ます何かが入っているに違いない。思わず、にまにまと頬が緩む。部屋に入り、待ちきれませんとばかりにレジ袋を漁（あさ）ると、コンビニで売っているデザートが数個と、B5サイズの箱が入っていた。加えて、親友の整った文字が並ぶメモ用紙が一枚。

『気晴らしにどうぞ』

箱を見ると、表には綺麗なアニメの絵。ファンタジー映画に出てきそうな騎士様や魔法使いの少年少女たちが、色鮮やかに描かれていた。ある者は燃える剣を掲げ、ある者

はぶかぶかのローブを羽織（は）っている。

「え？ ゲーム？ 私に？」

ゲームと名のつくものは、落ちてくるブロックをくつつけて消すパズルゲームぐらいしかやったことがない。もちのろんで、テレビに接続して使うゲーム機本体なんて持っているはずもなく……

だけど、その心配は杞憂（きゆう）に終わった。注意書きによると、どうやらパソコンで遊べるゲームらしい。パソコンなら仕事で使うから少しは使えるし、私も一台持っている。

ゲームの箱には、新品を証明するかのように透明のフィルムがついていた。ゲームに不慣れな私ではあるが、失恋した私のために親友が買ってきてくれたものを放置する気にはなれない。それに何か熱中できるものがあれば、辛さもまぎれるかもしれない。

私は本当に面白みのない人間で、没頭できる趣味の一つも持ち合わせていなかった。そのため仕事以外の時間は、ずっと彼のことを考えていても支障がない。そして恋にのぼせていた私は、それを実行してしまうほど乙女チックな奴だった。

「やってみますかあ」

私は泣き腫（は）らした目を擦（こ）り、パソコンを起動してゲームの箱を開ける。しかし——説明書の通りに操作しているはずなのに、インストールというものが上手くない。

奮闘したものの、その日はインストールができないままに終わった。

そして翌日。やはり苦戦してインストールはならず……

結局、ゲームを開始するまでに三日もかかってしまった。

その後さらに、キャラクターを作成するのに一日を丸々費やした。

なんとこのゲーム、自分が操作するキャラクターの見た目を、好きなようにカスタマイズできるらしい。最近はこのいうゲームが多いのかもしれないが、ゲームに疎い私が知っているキャラクターといえば、赤や緑の帽子をかぶった配管工に、まあいいピンクのゴムマリみたいな生き物くらいなものだ。だから、ゲームを起動した後は驚きの連続だった。

キャラクターは、顔まで変えられるらしい。目の色や大きさ、鼻の高さを変更して、唇も薄くした。すると、バリツと親父さん風だったキャラクターが、どことなく中性的な男の子に見えるようになった。

本当は女の子を作ったのだが、どうやらその選択肢はないらしい。

まあ、それもどうか。男の子のキャラクターだけでこんなに作りこめる仕様なのだ。女の子も、となるとゲームの制作会社の手が回らないよね——なんて知ったかぶってうんうんと頷いた。

仕上がりは満足し、私はゲームを保存してパソコンを閉じた。続きは明日、仕事から



帰ってきたらやろう。

このゲームをもらい、少しずつ元気が出てきた。ゲームをしている間は、彼のことを考えなくていいからだ。

私と彼は、同じ路線を利用している。気をつけないと通勤時に姿を見かけてしまうので、私の心が落ち着くまで乗車する時間や車両を変えることにした。

そうそう。親友にゲームのお礼メールを送ったら、簡潔な返事が来た。

『楽しかったら、一緒に遊ぼうね』

親友がくれたゲームはオンラインゲームといつて、ネット回線を通じて彼女とも遊ぶことができるらしい。一人で自宅にいても、親友と遊べるなんて——一生、彼女についていってもいいと思った瞬間だった。

次の日、私は少しばかりワクワクした気持ちで就業時間を過ごした。そして定時のチャイムとともに「お疲れ様でした」と頭を下げて帰る。

今日は、自炊する時間をもつたいたい。ほかほかご飯で有名なお弁当チェーン店でしようが焼き弁当を買うと、そそくさと家に帰ってパソコンを起動した。

「ただいまー！ ポチ！」

昨日作成したキャラクターには、ポチと名づけた。

実家で飼っている、^{よわい}齢十四になる愛犬の名前だ。

「さあ、冒険のはじまりだー！」

しょうが焼きを口に放りこみ、^{そしゃく}咀嚼しながらマウスを動かした。ディスプレイに表示された「ポチ」にカーソルを合わせて、ダブルクリックする。

その瞬間、画面から眩い光が^{まばゆ}噴き出してきた。あまりの眩しさに、驚きより先に痛みを覚えた私は、ぎゅつと強く目を^{つぶ}瞑った。

第一章 混乱の二歩目

肌に、かすかな風を感じる。

自宅の椅子に座っていたはずなのに、私はなぜか地面に座りこんでいた。

地面に触れている内腿が妙に熱い。焼けた鉄板の上に座っているような、蒸されたおこわの上に座っているような……はじめての感覚だった。

私は強く瞑っていた目を、恐るおそる開いていく。

——目の前の光景を、どう表せばいいだろう。

私はしばらくの間、呆然としてしまった。あまりの事態に、開いた口が塞がらない。

砂漠を見たことのない私だってわかる。ここは、砂漠だ。

平らな地面、緩やかな砂地、照りつける太陽。見渡す限り黄金色で、溜息が出るほど美しい。およそ目にしたことがないほどの絶景だ。

乾いた風が、頬を撫でていく。

しばらく放心したように砂漠を見つめていたが、ふと手に何か握っていることに気づいた。

硬い感触に加えて、ずいぶんと重い。長時間持つていれば、それだけで負担になりそうだ。

私は首だけをゆっくり動かして、手元に視線を向ける。

私の視界に、抜き身の刀身が映った。鈍く光るそれは、太陽の光をガラガラと反射している。どう見ても、短剣だ。

「え」

私の呟きは、誰もいない広大な砂漠に呑みこまれた。

私はなぜ、こんな物騒なものを持って、こんな場所に佇んでいるのだろうか。

この状況は、現実離れしすぎている。私は混乱しつつ、ファンタジー映画に出てきそうな景色と、手にした短剣を交互に見た。

混乱極まっている私の頭に、するりと一つの答えが浮かぶ。

「え、あれ。あ、そっか。これ、ゲームか！」

最近のゲームはキャラクターを作成できるだけでなく、その世界に意識ごと入りこめるようだ。

なんとという完璧な現状把握！

インストールとキャラクター作成については説明書を読んだが、ゲームの進め方についてはまだ目を通していいない。きちんと読んでいれば、この事態に混乱することもなかった。

ただらう。

武器を持つ自分の腕は、二十四年間慣れ親しんだ、ひ弱な体ではない。こんなに簡単にゲームに入れる時代が来るなんて、びっくりだね。そんなことを思いながら立ち上がり、短剣を持ち上げてみる。

……重い。とてつもなく、重い。

遠心力のおかげで振ることはできるが、それだけである。華麗な剣さばきで、舞うように戦えるわけではない。

……生き物に危害を加える可能性があるものを、こんなに無造作に振りまわしたのは生まれてはじめてだった。

だが、これもゲームなのだ。

それに、周囲に人の気配も感じられない。誰かに怪我をさせる心配はないだろう。

ひとまず自分が怪我をしないように気をつけていれば大丈夫、と短剣を両手で胸に抱えた。

「んーと、これで敵を倒せばいいのね？」

いまいちゲームの趣旨を理解していないのだが、おそらくそうに違いない。

敵を倒して進んでいけば、そのうち親友にも会えるだろうか？

キョロキョロ首を動かしてあたりを見渡すと、視界の端に動く黒い物体が映った。子

犬ほどの大きさのアリに見える。

「砂漠にアリ……にしても大きい……」

アレがいわゆる敵なのか。

配管工が登場するゲームにも、いるものね。亀とか、きのことか。あのアリを踏んづければいいのだろうか。

試しに踏んづけてみた。ぐによ、とした感触がして背筋に悪寒が走る。

アリは潰れたかと思うと、そのままシウシウ煙を立てて消えていった。

よかった。潰れた姿が残っていたら、本当に殺生せつしょうをしているようで気分が悪い。

これはゲーム、ゲームなんだ。うん、よし。

踏みつけた時の感触は、もう二度と味わいたくない。そこで次のアリは、手に持っていた短剣でサクッと刺してみた。上から一突きだ。それだけで事足りたのか、アリは再びシウシウ煙を立てて消えた。

しかし、今度はさつきと違うことが起きた。アリの消えた場所に、小さな物体が落ちていたのだ。

「アリの落とし物？」

働きアリだったのかもしれない。なんだか少し可哀想な気がしたが、ここは心を鬼にする。

これも、親友と一緒に遊ぶためだ。

あの親友に『すごい！こんなに強いなんて、さすがポチ様！頼りになるわ！』と言わせるのだ。いいや、言ってもらう……うん、言っていたくのだ。

そのためにも、アリには犠牲^{ギゼン}になってもらわなくてはならない。すまん、とアリに頭を下げつつ、腰に下げていた革袋に落とし物を押しこんだ。

三匹、四匹、五匹——とサクサク刺していくうちに、最初に降り立った場所から随分と歩いた。しかし、疲れは微塵^{みじん}も感じない。

ゲームだからだろうか。とてもありがたい、と短剣を握り直す。慣れてきたのか、最初よりも少しは扱いは上手くなってきた。

この砂漠を歩いていて、わかったことがある。

ここは広いけれど果てがないわけではなく、まっすぐ歩いていると端っこがあるのだ。そこには、光る輪っかのようなものが浮かんている。ただ、とてもじゃないが入る気にはなれなかった。

その輪っかに入れば、おそらく今よりも強い敵が登場するのだろう。

どんな検定も、級が上がるごとに問題は難しくなる。ブロックを組み合わせで消していくゲームだって、ステージが変わると、ブロックの落ちてくる速度が上がる。このゲームにも、同じ法則が当てはまるに違いない。

私は、まだアリで満足である。よって、この安全な場所から飛び出す勇氣も動機も持ち合わせていなかった。

ええい、持ち合わせていないったら、持ち合わせていない。

私は輪っかを意図的に無視した。

ここら一带にはアリしかないようだ。私は、サクサクと自分のペースでアリを刺していく。ありがたいことに、向こうから攻撃してくることはなかった。

腰に下げている革袋は、結構な数の落とし物を入れたにもかかわらず、満タンにはなかった。某猫型ロボットのお腹についているポケット的な仕組みなのかもしれない。

夕方になり、空が暗くなり始めた。

肌寒くなってきたが、防寒具もなければ火をつける道具もない。体を動かしていれば寒さを軽減できるはずだと、とにかくアリを刺し続けた。疲労しない体でよかった、と心から思う。

とはいえ、体は疲れなくとも時間は経過する。

気づけば、あたりが暗闇と静寂^{せいじく}に包まれていた。

これまで特に騒がしかったわけではないが、生物の活動する気配はあったし、何かしらの物音がした。なのに今は、まったくの無音。私は怖気^{おそけ}づいて、身震いした。

砂漠の夜は本当に真っ暗で、月明かりがわずかに足元を照らす程度だった。それに、先ほどよりも一段と空気が冷えている。

その時ふと、あることに気づいた。

このゲーム、どうやって終わらせたいの？

寒いなら、家に帰ればいい。つまり、ゲームをやめればいいのだ。

だけど、その肝心のゲームの終わらせ方がわからない。

一つのステージでアリを百匹倒すと、クリアできて帰れる——とか。そういうゲームなのだろうか？

いや、正確な数は把握してないものの、百匹はゆうに倒したはず。

それとも、あの光る輪っかをどんどんぐっていつて、すべてのステージをクリアしなければ帰れないとか……そういうゲームなの？

不安が募り、体が一層冷えていく。寒くて寒くて、私は腕をさすりながらしやがみこんだ。

寒い、怖い。

そういえば、ずっと一人だ。アリ以外に、動くものを見ていない。鳥の鳴き声はするのに、姿を見ることはなかった。かなりの距離を移動したのに、誰ともすれ違っていない。その事実、愕然とした。

このゲームは、ネット回線を通じて他の人とも遊べるんだよね？

だったら、どうして私しかないんだろう。もしかして、あまり人気がないゲームなの？

それとも、他の人は別の場所にいるとか？

これから、どうしよう。何をすれば、ゲームを終わらせられる？

ガタガタと体が震え出す。

終わり方のわからないゲームなんて、はじめるんじゃないかった。ううん、そもそもちゃんと説明書を読んでおくべきだったのだ。

自分の迂闊さが、ほんとと嫌になる。

いつも物事を深く考えずに行動してしまう。まわりの人に、オツムが弱いと言われる所以だ。

……まさか、ずっと一人ってことはないよね？

その可能性に気づき、凍えた手足よりもずっと肝が冷えた。

このまま誰とも出会わず、アリとともに暮らしていくとか……。こんなことなら、アリを殺すんじゃないかった。そしたら、友達になってくれるアリだっていたかもしれない。……いいや、仲間を殺す人間と友好的に話してくれるアリはいないか。

辛いなことにお腹は空かないけど、寒さには耐えられそうもない。夜は寒さに凍え、

昼は灼熱^{しやくねつ}の太陽に焼かれ、私はきつとぼろ雑巾^{ぞうきん}みたいに干からびていくのだろう。鼻がつんとして、視界がにじむ。

体を丸めてうずくまった。強く、強く心を持たなければ。

孤独に負けないよう、自分に言い聞かせる。

だけど、いくら体に力をこめたところで、震えは止まらない。

私はこんなに寂しい場所^{さび}で、ひとりぼっちで、誰にも知られることなく干からびていくのか。

不安が膨らみ^{ふくら}、体が氷のように冷たくなっていく。

恐怖が私を塗りつぶしそうになっていた、その時——

真っ暗な闇の中、視界の端にかすかな明かりが映った。

「君、大丈夫？」

優しいその声は、冷え切っていた体にじんわりと染み渡る。

心の底からの安堵、というものを生まれてはじめて感じた。心臓からじんわりと、体のすみずみ——指の先の毛細血管一本一本にまで温もりが伝わっていき、思わず涙がにじんだ。

今の私は、親友が言うところの『涙腺が崩壊した』状態に違いない。どういった時に使うのだろうと不思議だったが、今こそ、その言葉を使うべき瞬間だと思ふ。ついでに

言うと、鼻水の防波堤も決壊していた。

この広い砂漠で、ようやく出会った人。絶対にその人の手を離してはいけないと、本能が訴える。目の前に現れた人物に、私は薬にも絶る思いで飛びついた。

「お、おにいざんなんんなんん!! こ、この、ゲームの、終わりがた、おじえでぐだざいいいいいい!!」

涙と鼻水が、どばどば溢れる。いろんなものでぐしゃぐしゃになりながら抱きついた私を、薬——もといお兄さんは危なげなく受け止めてくれた。

しばらくして気づいたのだが、私の前に現れたお兄さんは二人いた。

「君、大丈夫？」と声をかけてくれたのは『お兄さんA』。彼はじっと私を見つめた後、なぜか腹を据って大笑いしはじめた。

一方、私が抱きついたのは『お兄さんB』。顔をしかめてこちらを見下ろしている。

私と同様、二人が身にまとっているのはTHE・ファンタジーという衣装だった。

およそ今までの二十四年間の人生でお目にかかったことのない服を、私はしげしげと眺める。

お兄さんAは、全体的に白かった。ゆつたりとしたローブのようなものを羽織り、頭には、まるでローマ教皇が着用されているような帽子をかぶっていた。もっとも、暗い

砂漠では彼の灯ともししているわずかな明かりだけが頼りなので、ぼんやりとわかる程度だ。清廉せいれんな雰囲気きずくに、穏やかな声。「善い」か「悪い」でたとえるなら、間違まちがいなく「善人」と言えそうな人物である。……いまだ無礼なくらい、大笑いし続けていたとしても。

対照的に、お兄さんBは真っ黒だった。全身黒くろすぐめだ。お兄さんAの明かりがなければ、見つけることができなかったかもしれない。

特筆すべきは黒いところだけかなー、なんて何気なく彼の顔を見た瞬間、私は平伏ひれふしなくなった。オレンジ色のほのかな明かりに照らされたその顔は、素晴らしく綺麗きれいで艶つやっぽかった。

どうがんばれば、こんなイケメンを作れるのか。キャラクター作成に一日も費つやした平凡なボチの顔を思い出し、私は少ししよげた。

そういえば、どこかで見たような顔だ。彼の美しい顔を眺めながら首を捻ひねる。もしかしたら、人気の芸能人を参考にして作ったのかもしれない。

考えてみたら、キャラクターデザインを自由に決められるゲームで、わざわざ不細工ふさいくにすることはあまりなさそうだ。

お兄さんAもお兄さんBも、拝みたくなるほどの大層なイケメンである。

二人は、衣装の色だけでなく表情まで対照的だった。先ほどから壊れたみたいに笑いつけているお兄さんA。怒っているのか心配になるほど、眉間に深く皺しわを刻んだお兄さ

んB。

お兄さんBは仏頂面ぶつどうめんを隠すように、首から顎あごにかけて黒いスカーフを巻いていた。それがどこなく悪人を連想させて、私は彼に抱きつきながらも震え上がる。

しかし、この手を離してまた一人ぼっちになるのは、絶対に嫌だった。お兄さんBの服を握る手に力をこめた。

お兄さんBから不機嫌なオーラが漂ってきたが、お得意の鈍感なふりで綺麗さっぱりスルーした。

……それにしても、人肌はやっぱりあたたかい。暖を求めて彼の胸に頬を擦こすりつけた時、何やら冷たいものに触れた。不思議に思って少し顔を離せば、彼の着用こそしているスカーフに、私の涙と鼻水がべったりくっついていてではないか。

私は卒倒そたうしそうだった。一瞬にして、血の気が引いていくのを感じる。

こんなに不機嫌な彼に、なんてことを……。小刻みに体が震え、堪こえきれず涙がこぼれた。見上げると、お兄さんBは先ほどと寸分変わらない表情で私を見下ろしている。

私の怯おびえように、お兄さんBが長い溜息ためいきをついた。軽く肩を押され、言外に離れろとほのめかす。

私は蚊かの鳴くような声で謝罪し、ほんの少しだけ下がった。けれど、彼の服の裾を握ったままの私の手を見て、お兄さんBは先ほどよりも眉間の皺しわを深める。

お兄さんBは私の涙と鼻水で汚れたスカーフを面倒くさそうに剥ぎ取り、腰に下げていた袋の中へ乱暴に押しこんだ。その粗野な態度に、私はびくりと震えてしまう。この人、あんまり得意じゃないかもしれない。でもまあ、それでも離れてやるつもりは毛頭ないんだけど。

そんな私たちを見て、お兄さんAはさらに大笑いした。体をくの字に曲げ、目には涙まで浮かべている。目元を拭った彼の指は、そこらへんの女性より細くて綺麗だった。
羨ましくってやんなっちゃう。

いつまで経っても笑い続けているお兄さんAを、キツと見つめる。こちらは恐怖で涙がちよちよぎれそうなのに、ひどい話だ。

「ははっ……ごめんね……っふう、こんばんは」

ようやく落ち着いたのか、お兄さんAが口を開く。

「あ、どうもこんばんは」

思いがけず常識的な挨拶をされ、私は慌てて頭を下げた。すると、噴き出すのを堪えるように、お兄さんAが話を続ける。

「このゲームの終わり方ね、ははっ。ま、まず、はっ、手元のキーボードのEscキー、わかる？」

「え」と思わず声が漏れた。

お兄さんAは当たり前のように『手元のキーボード』と発言した。しかし、ここにいるポチ——つまり私の手元にキーボードはない。この数時間のうちにすっかり手に馴染んだ短剣が一本、鈍く光っているだけだ。

あれ、これ、やばくない？

私は不安になって、お兄さんBの服を強く握りしめる。

「Escキーを押したら、画面の上にログアウトってアイコンが出てくるでしょ？そこをクリックすれば、終了できるよ。オートセーブだから、この場でログアウトしてかまわないし」

にっこりと、大変爽やかな笑みを浮かべて説明してくれたお兄さんA。彼は、さあどうぞとばかりに手を軽く振った。

「あ、ああああありがとうございます。後でやってみます」

ログアウトやオートセーブといった、聞き慣れない言葉については置いといて。

私は涙のかわりに、大量の汗を流しはじめた。

ようやくゲームを終わらせることができると安堵したのに……ありもしないキーボードのEscキーを押すことはできない。でも彼らにそれができるなら、私だけが異常事態に陥ってることなんじゃないだろうか？

再び不安が募り、体が震えそうになる。だけど、お兄さんたちにこれ以上は何も尋ね

られない。だって、せっかく一人ぼっちじゃなくなったのに、私が異質だと思われたら、二人に置いていかれてしまうかもしれない。

「うん？ ログアウトしたくて、泣いてたんじゃないの？ 試しにやってみたらいいよ」
優しく尋ねてくれたお兄さんAに、私は大慌てで首を横に振る。

「いえ、後でやってみます。大丈夫です、ちゃんとできます」

どうにも、視線が泳いでしまう。お兄さんAは、私を追いつめるように顔を覗きこんできた。

「ここで見えてあげるよ」

うっ、美形はそれだけで破壊力があるんです。至近距離で見つめないでください。

「だだだだだだだいいじょうぶです。ほんとうに、だいじょうぶですの！」

日本語の『大丈夫』ほど便利な言葉はないと思う。

わざわざ見てもらわなくても大丈夫、教えてもらった方法を理解したから大丈夫、

自分は平気なので大丈夫——と複数の意味をこめられる。

頭の中身が、綿菓子みたいに軽い私が多用する言葉である。

私の慌てっぷりを見て、お兄さんAはぷつと噴き出した。そしてまた体をくの字に曲げ、腹を抱えて大笑いしはじめる。

そんな彼に呆れた視線を向けたお兄さんBは、ついに口を開いた。

「もうやめてやれ。おい、お前もゲームから出られなくなった人間だろ？」

「……………へ？」

ゲームから出られなくなった？

「あの、やつぱりこれって、こういう体感ゲームじゃないんですか？」

そう呟いたとたん、お兄さんAは爆笑し、彼の顔面は崩壊した。



「ただいま、見つけてきたよ」

お兄さんAが明るい声でそう言うと、少年独特の少し高い声があたりに響いた。

「おっそい！ どこにいたんだよ、最後の一人は！」

「んー、砂漠でアリと死闘を繰り広げてた？」

そう答えたお兄さんAに、今度は鈴を転がすような女の人の声が聞こえる。

「……アリ？ アリって、あのアリのこと？」

「はあ!? レベルいくつなわけ……」

呆れたように言う少年に、穏やかで優しい声が続いた。

「うーん、それは戦力になりそうにないかなあ」

お兄さんたちに案内された場所で待っていた三人は、それぞれの反応をした。

彼らの賑やかな声が聞こえてくるが、それより私は目の前に広がるファンタジー全開な街並みを観察するのに夢中だった。

あの後、砂漠から脱出すべく、お兄さんAは魔法で光の環を創り出してくれた。言われた通りそれをくぐり抜けると、一瞬のうちに、石畳の道に煉瓦の建物がひしめく街に降り立っていた。中世ヨーロッパをモデルにしたような、とてもレトロで趣がある、テーマパークみたいな景色だった。街道に設置された明かりはあたりを煌々と照らし、今が夜中だということを忘れさせた。

この明かりは魔法で灯されているらしい。注意して見てみれば、街の至るところに魔法がかけられているみたいだった。

すぐ傍にある広場の中央には、綺麗な放物線を描く噴水。だけど、水の色が違う。虹色に輝く水流は美しく、とても神秘的だった。

噴水のまわりにはランタンのようなものが支えもないのに宙に浮き、不可思議に色を変える炎がゆらゆらと揺れている。

幻想的な光景に、思わず溜息がこぼれた。

お兄さんAいわく、ここはゲームの舞台となる国の首都らしい。けれど、この美しい街には人の姿が見られない。閑散としていて、ひどく寂しかった。

——異常事態。端的に現状を表すには、この四文字がもっともふさわしい。

砂漠からここに来るまでの間、少しばかり状況説明をしてもらった。

本来、このゲームはパソコンの前に座り、キーボードを使ってプレイするものらしい。「やっぱり変だと思ったんだ」と、私はうんうん頷いた。そんな私の反応を完全に無視し、お兄さんAは説明を続ける。

どうやら私たちは、なぜかこのゲームに閉じこめられているらしい。

私と違い、ゲーム玄人である他の人たちはその異常事態にすぐに気づいた。他にも同様の事態に陥っている人がいるかもしれない——それぞれがそう考え、ゲーム内でよく待ち合わせに使われている首都へ向かった。

首都はゲーム内で一番多くのサービスを受けられる場所でもあるため、何か脱出の手掛かりがあるんじゃないかと踏んだのだという。

同じことを考えていた五人は見事に合流。経過を報告し合い、現状を把握した。

サービスの一つでゲームをプレイしている人数を確認できるものがあり、計六人が閉じこめられていることを知った。しかしここで問題が起きる。首都に集まっていたのは、五人だったのだ。

しばらくは最後の一人である私を待っていてくれたが、いくら待ってもやってこない。どこかで動けない状況にでもなっているのかもしれないと、五人は探索に出かけること

にした。

手分けをして、主なダンジョンや街をくまなく探す。しかし、どうやっても見つからない。

強い敵がわんさかいる、高レベル者向けのダンジョンも搜索したと聞いた時、私は身震いした。もし最初に降り立った場所がそこだったら……ゲームをはじめた瞬間、人生が終わっていただろう。砂漠で、そしてアリで、本当によかった。

五人はあらかた探索した後、まさかと思いつつ、低レベルなキャラクターを育成するためのフィールドを探すことにした。そこで、アリと死闘を繰り広げている私を見つけた——というのが、これまでの経緯らしい。

お兄さんAは、時折大笑いを挟みながらも、丁寧に説明をしてくれた。しかし、正直なところ、私はあんまり理解できていない。思い出してほしい。私はバズルゲームしかしたことがないということを！

自信満々にはてなマークを量産していると、お兄さんBには呆れと憐みに満ちた目を向けられた。

とはいえ、そんな視線には慣れている。

ゲーム初心者なりに、頭の中身が綿菓子みたいに軽い私には、現状を正しく理解するのは到底無理だし、ましてや打開策なんて絶対に浮かばない。だから、もうここは平身

低頭して皆さんに丸投げしてしまう気満々なのである。

お兄さんAから『最後の一人を見つけた』と連絡を受け、首都で待っていてくれた三人。彼らもやはり、ファンタジー映画を連想させるような、個性的な格好をしていた。

美しい街並みをじっくり堪能した私は、あらためて三人に目を向ける。

そしてそのうちの一人に、目が釘付けになった。露出狂^{みしつぽう}といっても過言ではないほどの格好をしていたのだ。豊満な肉体美を惜しげもなく披露^{ひろう}し、胸元にはなんと羨まし^{うらや}い大きなまあるいメロンが二つ……

「お、おっぱいが！ おんなのひとがいるー!!」

思わず私は、その女性を指差して叫んでしまった。

「第一声がそれでいいの？ ねえ、それでいいの？」

お兄さんAが、再びお腹を抱えて笑いながら言う。

女性是不愉快そうに眉根を少し寄せたが、すぐに妖艶^{ようえん}な笑みを浮かべた。そして肉感的なボディを見せつけつつ、こちらに詰め寄ってくる。

「なあに、ぼうや。女がいたらおかしい？」

「いいえ、そんなことはありません、女王陛下。大変素晴らしいダイナマイトボディで、

眼福^{がんぷく}でございます」

すぐ傍^{そば}にいるこの美女を抱きしめて、マシユマロみたいな体をむぎゅむぎゅしたかつ

た。心の赴くままに、満足のいくまで、むぎゅむぎゅしたかった。

しかし美女が言った通り、今の私の体は『ぼうや』なのだ。実行すれば、確実に犯罪者となってしまうだろう。

美女の衣装にもお胸のサイズにも驚いたが、それ以上に驚いたのは、『女』という性別を選択できたことだ。一日も費やしてキャラクター作成したことを軽く自慢に思っていたが、いたずらに時間を使っただけらしい。まさか、女性キャラクターを選べたなんて。

おかしいと思ったんだよ！ 男しか選べないなんて！

……いいえ、嘘です。思っていました、本当にすみません。

ああ、私も豊満なおっぱいをぽよんぽよんできるキャラクターを作ったかった！ リアルでは胸元が控えめな分、ゲームの中で夢を見て何が悪い！

いいな、ぽよんぽよんおっぱい。せめて触らせてもらえないかな。

物欲しそうな目をしていたことがばれたのだろうか。

お兄さんBに頭を軽く小突かれた。彼の鋭い目が怖かったので、さっと視線を外して『気をつけ！』の姿勢を取る。

「なあ、あんた。レベルはいくつなわけ？」

「とんだエロガキじゃなか」と呆れと嫌悪の表情を浮かべた少年が鋭い視線を向けてき

た。彼はお兄さんたちよりも、少し幼く見える。十五、六歳の少年といった風貌で、身体的にはポチと似ている。しかし、ポチとはまったく違う特徴があった。頭の上にぴょこんと出ている、ふわふわの獣の耳。三角形でとんがっているその耳は、猫の耳によく似ている。黒くて艶やかな毛並みが、触って触ってと私を甘く誘惑する。

この耳は、装飾品か何かだろうか。もしくは、キャラクター作成時に性別だけでなく、種族みたいなものまで選べたのかもしれない。

可愛らしいお耳は、彼が話すたびにピコピコと動く。誘惑に負けそうな私は、言わずもがな愛らしい耳に目が釘付けだ。

……と、いかんいかん。目の前の可憐なお猫様が怪訝そうな表情をしている。先ほどの彼の質問に答えようとした私は、ふと首を傾げた。

「ええと、れべる？」

そういえば、お兄さんAの説明にもそんな単語が出てきた気がする。

「レベルの意味も知らないって……初心者どこの話じゃないだろ……」

啞然とした顔で咳くお猫様に、私は○円にすらならないお愛想スマイルを振りまく。うふふ。

すると、ますます呆れたような、鋭い視線を向けられた。

「レベルというのは君の強さだよ。一からはじまって、ここにいる人たちは大体九十前

後だ」

そんな穏やかな声に誘われて横を向いた私は、そこにいた恐ろしい人物にヒッと息を呑む。

見上げるほど背が高いその人は、角ばった輪郭に、日本人離れした彫りの深い顔をしていて、頬に走る大きな傷と、厳つい顔つき。

そして、銀色に鈍く光る、頑丈そうな鎧を全身にまとっていた。

体格はものすごくがっしりしていて、筋肉が鎧を着て歩いているようにも見える。二の腕は、私の腿ぐらい太いかもしれない。まるで熊だ。ファンタジー映画などに出演していたら、確実に将軍クラスだろう。

しかし、落ちてよく見れば、眦は優しく下がっているし、太く立派な眉は八の字を描いている。一見強面な上にも、ものものしい鎧を身につけているから恐ろしく感じたが、実はいい人なのかもしれない。彼の優しい雰囲気には、私はへらりと頬を緩めた。脳内には、鎧を着たデイベアが浮かぶ。こんなに優しい声を出す人が、怖いはずがない。

「よしよし。お兄さんが説明してあげよう」

熊將軍の後ろからひよっこ顔を出したお兄さんAが、解説を買って出してくれた。

「レベルっていうのは、君が強くなったことを示す数値。こういうゲームでは、重要なんだよ。強くなれば体力や精神力が増えるだけでなく、身体的な能力、使用できる技、

装備できるアイテムが増えていくし、スキルを覚えることもできる。あ、スキルっていうのは特殊な能力のこと。戦闘なんかで使うと、精神力が消費される」

「えっと、有名な配管工が手から出す、炎みたいなやつですか？」

「うん？ ああ、赤い帽子の配管工ね。うん。そういう直接的なものもあるし、間接的なものもある。たとえば足が速くなるスキルとか、魔法を上手に唱えることのできるスキルとか。説明しだすとキリがないほど種類が多い……けど。まあその分じゃ、職業も把握してないだろうからねえ。そういう話は、おいおいしていこう」

「も、申し訳ないです……！ また今度でお願いします……！」

お兄さんAは、早々に話を切り上げてくれた。きつと、私の頭が大量のはてなマークで埋め尽くされているのを察してくれたのだろう。

私たちの様子を見ていたお猫様が、苛立ったような声を上げる。

「チュートリアル、やっただろ。馬鹿すぎて呆れる」

「ちゅーとりある？ 芸人さんですか？」

再び知らない単語が出てきた。ここまで知らないことだらけだと、さすがに申し訳なさでいっぱいだ。知らなくても知っているふりをしたほうが、彼らに負担がかからないんじゃないだろうか。

真面目にそう考えていたら、ふと視線を感じた。熊將軍が、真剣な表情で私の足元を

見つめている。まさか、敵でもやってきたのだろうか。慌てて足元を見たが、そこには何もいなかった。

首を傾げつつ、内股になっていた足をさりげなく戻す。危ない危ない。いくら外見は男の子だとはいえ、内股で立っていたらオカマさんに見られてしまうかもしれない。気を取り直して熊將軍に目を向けると、彼は目尻に皺を寄せて優しく微笑んだ。

「大丈夫だよ」

何が大丈夫なのかわからないまま、私は頷いた。そして、ふと気づく。彼は、初心者で何も知らなくても大丈夫だよ、と優しく励ましてくれたのかもしれない。

へらりと笑みを浮かべた私に、お兄さんAは首を傾げながら問いかけてくる。

「チュートリアルもわからない？ ゲームをはじめてすぐ、操作方法の練習みたいなのをやらなかった？」

「そうさほうほうのれんしゅう……」

「どこをクリックすればアイテムボックスが開けるーとか、レベルが上がるとこういう数値が上がるーとか。ゲーム内のルールを実践形式で教えてくれるんだけど」

丁寧に説明してくれたお兄さんAには悪いが、私は首を横に振った。

「申し訳ないのですが、多分やってないです。キャラクター作ってさっ、やるぞー！ つてクリックしたら、あの砂漠に降り立ってまして……。それから、アリを刺す作業し

かしてません……」

「……そうだよねえ。何しろこの異常事態を、『あ、こういうゲームなんだー。最近のゲームはすごいなー』なんて思いながら過ごしてた強者だもんねー」

自分で言って笑い出したお兄さんAは、再びお腹を抱える。笑い上戸にもほどがあるのではないか。

「じゃあゲームはじめたと同時にトリップしたから、チュートリアルなんて知らないってこと？」

お猫様が眉をひそめて言う、肩を覆うマントのようなものがはためいた。彼の声は刺々しい。私の出現を喜んでいないことがはっきりとわかる声色だった。

「そういうこともかね。じゃあオンラインゲームはもろろん、他のゲームもあまりやったことがないのかな？」

大木のような巨体を屈めて尋ねてくる熊將軍に、私は項垂れながら返事をした。

「はい……ゲームっていえば、ブロックを回転させてくつつけるパズルぐらいしか……」

実のところ、そのゲームだって三ステージくらいまでしかクリアしたことがない。しかし、そこまで弱さを暴露する必要はないだろう。私は視線を泳がせて、お口にチャックをした。

「な、なんていう純粹培養の初心者……何年ぶりに見たかしら……」

豊満ボディのお姉さんは感嘆にも似た声を上げ、熊將軍は手を合わせて言う。

「崇めところ」

「え？ え？」

なぜ崇められるのかまったくわからない私は、二人を前にオロオロしてしまふ。

「え、何なに。何やってんの？ うん？ え、RPGどころかゲームもしたことない初心者?? 僕も一緒に拝んどこ」

いつの間にかお兄さんBと話しこんでいたお兄さんAは、熊將軍から私の事情を聞いて、手を合わせた。私はさらに困惑し、両手をばたつかせて口をパクパクさせるばかりだ。さながら鶏である。

お猫様はそんな私たちに冷めた目を向けた後、視線を逸らした。

お兄さんBも呆れた表情をしていたけれど、軽く首を横に振り、皆が私を拝むのをやめさせてくれた。ちなみにギロリと睨んだだけで、特に何か言ったわけではない。お兄さんBの眼力は、それほど恐ろしいのだ。

「しょうがない。からかうのはこのくらいにしてやるか」

お姉さんは腰に手をあてて言う。

からかわれてたの!? と目を向けると、お姉さんは可愛い桃色の舌をぺろりと出して顔を上げた。

「ごめんなさい。だって、面白いから」

そんな風にしなを作って謝られたら、許すに決まってるじゃないですかー！ 鼻の穴が広がらんばかりに鼻息荒く、私は頷いた。

一方、熊將軍はハリウッドスター顔負けの微笑を浮かべて言った。

「ところで、旅人君。君の名前は？」

旅人君……？ 熊將軍はこちらに顔を向けているので、それは私のことに違いない。

普通に答えようとして、思いとどまる。ここで言うところの名前とは——きつと二十四年間慣れ親しんだ自分の名前ではないだろう。

私は、実家で飼っている愛犬を思い浮かべた。今頃あの子は私の危機も知らず、庭先でのんびり惰眠を貪っているだろう。

「申し遅れました。ポチと申します」

私が挨拶した瞬間、お兄さんAは爆発した。

もちろん爆発というのはもののたとえである。爆発するかのように、大きく噴き出したのだ。彼は、お腹を振って地に伏した。

「あははははは！ あははははははは!! ダメ、僕、この子ツボ！ あはははははは！」
一通り笑ったお兄さんAは、「元の世界に帰ったら、ポチのこと飼いたいなあ」なんて軽口を叩いた。私は、『元の世界に帰ったら』という言葉に安堵する。

皆が堂々としているから、もう怖くない。この人たちについていけば大丈夫なんだ。頼りになる人たちと出会えて、私は心の底からホッとした。



「わかりました！ レベル！」

その後、私は皆に教えてもらいつつ、なんとか「身分証」を発行してもらった。

これには、いろんな情報が載っている。自分の生死に密接に関わる体力。さっき教えてもらった、スキルを使うのに必要な精神力。そして私の強さを表すレベル。レベルの項目の下には、攻撃、守備、敏速、魔法、技術、幸運……といった能力が並んでいる。それぞれの数値は、人と比較のしようがないのでサッパリだ。

とはいえ、これでやっと自分のレベルが判明した。

「いくつだった？」

私の手元を覗きこむお兄さんAに、身分証を掲げて答える。

「はい、22でした！」

私の発言に、三人が噴き出した。

「アリで……アリで22……しかもソロ……!？」

「僕、がんばったのね……」

「あっははははは!! あはははは!!」

お猫様と巨乳お姉さん、そして言わずもがな、お兄さんAだ。

ナイスバディにぎゅっと抱き寄せられ、私は豊満なおっぱいに埋もれた。羨ましいな、この肉体。むぎゅむぎゅしたいぜ。

だけど、すぐにふわふわのお乳様から解放されてしまう。私は伸びきったセーターのようになへろになつた顔を、必死に取りつくろつた。

「私のレベル、何か問題があるんですか？」

私が尋ねると、お兄さんAが口を開く。

「普通は、自分のレベルに合ったモンスターを倒していく人が多いんだ。そのほうがもらえる経験値も多い……つまり、レベルの上がり方が速いからね。レベルが上がると、同じモンスターでも得られる経験値が下がる。アリからそれなりに経験値をもらえるのは、せいぜいレベル8くらいまでじゃないかな。レベル20以上なら、ちよつとしたダンジョンに行っても大丈夫なレベルだしねえ」

すっかり解説役が定着してしまったお兄さんA。

私はほーと頷くが、悲しいかな、きちんと理解できたのは三割程度だった。

私がアリと戦っていたのは、効率が悪かったってことだろうか。ミシンがあるのに、

必死に手縫いで雑巾を百枚縫っていました、みたいな感じかな。

私が考えこんでいると、お兄さんBが不機嫌そうに眉根を寄せて言った。

「それなのに、まだ旅人のままか？ 転職しに行け、転職」

お兄さんBは、ほとんどしゃべらない。寡黙な人っていうのは、こういう人のことなのかもしれない。

まじまじと見ていたのが氣に障ったのか、彼の眉間の皺が深くなったので、私は慌てて頭を下げた。

「ええと、今の職場は割と気に入っているんで、できればこのまま続けたいのですが……ま、万が一、やむをえない場合は同じ事務系の職種が」

「誰がリアル話をした」

間髪をいれず、お兄さんBが言った。

「あはははははは!! あはははははは!! もうダメ、もうやめて。ポチ、それ以上しゃべらないで」

ひいひい悲鳴を上げて地面にしゃがみこむお兄さんA。

そんな彼を無視して、私はお兄さんBに慌てて言葉を返した。

「あの、すみません。実はインストールに三日、キャラクター作成に一日を費やした超初心者でして……」

お兄さんAの笑い声は、一層大きくなった。その声は笑すぎて掠れている。お猫様は、お兄さんAを見て完全に引いていた。その隣では、熊將軍がほのぼのと皆に目を向けている。

お兄さんBは、苛立ったみたいにお兄さんAを軽く踏んづけて言った。

「わかった。けど一から説明する時間はあまりない。お前の育成に時間を割くつもりもない。俺たちは今日ゲームに実装された期間限定の塔——上弦の塔を上る。塔の最上階にいるボスを倒せば、来年の本実装に先駆けて『転生』システムを利用できるからだ。確証はないが、それで元の世界に帰れるんじゃないかと思ってる。もう、これ以上は説明しないぞ。とりあえず、てっぺんのボスを倒す。わかったな？」

とりあえず、てっぺんのボスを倒す。オーケー、わかった。

私は少しぼかんとしながら、何度も首を縦に振る。

お兄さんBは、言葉を続けた。

「それで、悪いがお前にそのまま塔に同行されちゃ迷惑だ。いくら俺たちが強くても、かばいきれない」

「……わかります」

今、私が倒せるのはアリだけだ。こっそり皆についていったとして、その塔とやらを上っている時に、流れ弾に当たって死んでしまう可能性が充分にある。

お兄さんBの言葉に、私は卑屈にならないよう神妙に頷いた。

「だから悪いが、お前には強い職ではなく、死にくい職に就いてもらいたい。今からどうがんばったって、お前が戦力になるまでには、だいぶ時間がかかる。それなら時間をかけて強くしていく職より、強くなくていいから死にくい職に就いてほしい。わかるな？」

「はい、わかります」

私が頷くと、目の前に丸太のような腕が伸びてきた。

「それはちよつと横暴じゃないか。ゲームをはじめたばかりの子に、その言いぐさはあんまりだ。職業ぐらい選ばせてやろうじゃないか。足りない分は、私たちがフォローすればいいんだし——初心者なんだ。わかるだろう？」

今まで静観していた熊將軍は、穏やかに、だけど有無を言わさぬ口調で言う。

私は、その言葉の意味をよく理解できなかった。一方、お兄さんBはひどく感傷的な表情をしたが、すぐにまた無表情になる。

「平常時なら、俺だってそうしてる。けど、今はゲームを楽しんでる場合じゃない。何もわからないんだ。誰も正解をくれない。キャラクターが死ねば、リアルの死に繋がる可能性だってある。そんな中、俺たち上級者がこいつにしてやれることはなんだと思う？」
口調に少し陰があるものの、お兄さんBの言葉は私の胸にまっすぐ届いた。

彼は、弱い私を迷惑に思っているわけでも、邪魔者にしようとしているわけでもない。彼なりの方法で、私を守ろうとしてくれているのだ。

熊將軍もそれに気づいたのか、ハツとした表情を浮かべる。私は、これ以上、場の空気がおかしくならないよう大慌てで声を発した。

「あの、大丈夫です。もともと、なりたいた職業というのにもよくわかっていないので……大変申し訳ないのですが、お力添えいただけたら嬉しいです。その、言い方は悪いですけど、ご助言いただいた通りにしたほうが生存率が上がるなら、喜んで皆さんに従わせていただきます。今はできる限り、皆さんの負担になりたくありません」

そう、今はゲームを楽しんでいる場合じゃない。とにかく、皆で無事帰れたら、それでいい。

本当は自分で調べたりしながら、あーでもないこーでもないかと、職業を決めるものなのだろう。しかし、もともとゲームの苦手な自分がそこまでするか考えると、はなはだ疑問である。進むべき道を決めてもらえるのは、とてもありがたかった。

その後、お兄さんA、お兄さんB、お姉さん、お猫様、熊將軍、私の六人で、パーティーというものを組んだ。ゲーム内で、この六人が仲間になったよ的なことらしい。そして出発に向けて準備を進めつつ、皆が職業について教えてくれた。